

● 高澤良一 第五句集 鳩信

● 入院日誌

カテール検査入院

食器には皆蓋のあり万愚節

何もって本復巷は花の頃

検査日の諸葛菜彩薄れをり

この術例三百ほどと亀鳴けり

検査の為の検査蛙の目借時

春の夜のまなぶた閉じて患者たり

患者食済みし春昼箸洗ふ

目に見えて体力戻る春大根

大部屋の消灯までの春灯

大部屋の患者寢息の朧なる

春眠曉を覚え目覚めぬ大部屋に

亀鳴けり医術日進月歩の世

体温計鳴り出す春の夜のとばり

春の夜の手術痕撫で寝入るまへ

春の夜を看護婦消灯触れ廻る

点滴の終りを告ぐる朧ごゑ

春夜尿りて体外へ出す造影剤

退院の途次の暮春の中華蕎麦

梅雨といふ辟易月に入りにつけり

一通り聞きて入院梅雨海鼠

黴どきの無精が無精生む寢床

東京の朝焼け入院一日目

易々と蠅にたかられ一患者

夏物のパジャマ引っ掛けギブスの上

七夕の夜風にあたるギブス組

ギブス組涼みがてらの莫迦話
包帯に患部包みて星祭
かがんぼ来夜間急患窓口に
おろしたてパジャマに夏の夜の更くる
胸板に夜風涼しみゐる患者
病床に妻もたらしぬ厄除護符
幾そ度かがんぼ吾の採血よ
注射針ぬうつと太き昼寢覚
採血の跡黄味がかかる肌小暑
夏の夜の採尿採っても採ってもや
人参も余さず食ふぞ新患者
病棟の深夜冷房音どすん
白扇に茶化しきれざる病景色
永日のそもそも何でこの病ひ
術後の日の為の浴衣を着慣らしぬ
真裸にて辿り着きたる正念場
甚平が術後の吾を待ってをり
手術着に所詮孤りとなる裸
烏賊俳諧オペ景色医長(病棟は水槽)やおら脈拍とりドクターにけり
蛸博士 腹式呼吸教授せり
執刀はノコギリ鮫の某教授
麻醉利き水母漂ふごとくなり
蘇る為ICU室の管吸ひ罌粟のゆめ
麻醉覚昼寢覚ではなかりけり
細魚さより嬢ナイス看護婦寝起きの声掛けぬ
救命の手術当日管のいろいろ巴里祭
管ぶらさげ鳴り物入りの巴里祭

ほぐれ初む麻酔の糸や脳涼し

術後にしてこんなうまき一氷片
冷房裡才家人と面会へ顛末記筆談に

天蚕いろカーテンに覚む患者なり

新聞売りのおばさんのこゑ明易し

術後十日重湯すすりて病ミ海鼠

暑き日の飯粒何處に三分粥

声の主一体誰や昼寢覚

元気出てかぼちやいろなる尿の色

豆ごはんほつと安堵すその彩に

肌伝ふシャワーに骨皮筋右衛門

患者等大部屋のわれらが宝庫冷蔵庫

床擦れに手こずり居れば夏曉の日

牢名主めく患者ゐて部屋晩夏

見舞客勝手に変へて冷房「強」

素手素足ずいぶんすっきりした色に

昼寝せるゼブラ縞柄パジャマかな

退院の挨拶だぶつく夏ズボン

話かいつまんで云へばと古扇

自宅にて養生始まる朝の蝉

脚力をつけんとゑのころ草の道

ゑのころの光れる試歩は朝の内

藪の葉に大いなる穴開けし奴

病み上がり足許いとどに跳ばれけり

朝蝉が啼かぬとある日来たりけり

水を搔く仕草も秋のあめんぼう

かまつかの錦の御旗振るごとし

秋寂びて縦一文字手術痕

病閑やくわりんのおいど日を受けて